

Die Kämpfe vor Moskau

戦略分析

氷雪に隠されたドイツ軍敗北の真因

モスクワ攻防戦

ドイツ軍、赤い首都の門前で敗退
それを招いたのは、ヒトラーの作戦指導ミスか
冬将軍の猛威か、それとも補給の欠如か
だが「失敗の本質」はドイツ軍最高統帥部の
計画自体に内在していた

文 = 山崎雅弘



東部戦線 最初の天王山

一九四一年九月三十日に開始されたドイツ軍のモスクワ攻勢「台風作戦」は、東部戦線における初年度の天王山であったのと同時に、ドイツが軍事力のみでソ連邦という大国を体制崩壊の瀬戸際まで追い込むことのできる、最初にして最大のチャンスでもあった。

このドイツ軍によるモスクワ攻撃作戦の経緯については、これまで主にドイツ軍側の視点からの分析が主流として語られ、總統ヒトラーの首尾一貫しない戦略構想や、ロシアの厳すぎ冬の寒気などが、失敗の原因として挙げられてきた。だが、六〇年が経過した今、改めて独ソ双方の視点からこの戦いを分析し、当時の事実関係を洗い直してみると、そうしたドイツ軍人の弁明とは一致しない歴史的事実が次第と浮かび上がってくる。

例えば、ドイツ陸軍の総司令官ヴァルター・フォン・ブラウヒッヂ元帥と、陸軍参謀総長フランツ・ハルダー上級大将は、対ソ侵攻の計画立案段階から開戦後の四一年七月中旬までの間、モスクワを作戦上の優先目標にしないというヒトラーの戦略方針に完全な同

意を与えており、モスクワ占領を作戦上の最優先目標と認識するドイツ軍野戦司令官の意見に彼らが耳を傾けるようになつたのは、四一年七月下旬に入つてからのことだつた。

言い替えれば、戦略構想が首尾一貫していなかつたという点では、陸軍の首腦部においても同じだつた。そして、スマレンスク会戦が終了した後、ゲーリアンの第2装甲集団を南へと旋回させるという歴史的な決断も、実は陸軍総司令部が開戦以前から想定してい

た計画に存在していた、戦略的判断に基づくオプションだったのである。

それでは、ドイツ軍が敵首都の前面で力尽きたモスクワ会戦とは、実際にはどういう戦いだったのだろうか。これまで語られてきた数々の「通説」は、はたして歴史的事実と一致しているのだろうか。

そして、ドイツ軍はいかなる理由でモスクワ会戦に敗北し、ソ連赤軍はどういうにして、この国家存亡の危機を乗り切つたのだろうか。

モスクワ会戦に敗北し、ソ連赤軍はどういうにして、この国家存亡の危機を乗り切つたのだろうか。

そこで、ドイツ軍はいかなる理由でモスクワ会戦に敗北し、ソ連赤軍はどういうにして、この国家存亡の危機を乗り切つたのだろうか。

モスクワ攻略への序曲

ソ連侵攻計画における モスクワの位置づけ

ヨーロッパ東方にドイツ民族の「生活圈（レーベンスラウム）」を獲得すべしという總統ヒトラーの意向を受けて、

その後、陸軍の上層部では極秘裏に、対ソ攻撃の研究が幾つものチームで並行して進められ、またヒトラー自身も四〇年七月三十一日以降、ソ連との戦争に関する自説を会議で披露していた。同年九月三日に陸軍参謀次長に着任したフリードリヒ・パウルス中将（後に第6軍司令官としてスターリングラード包囲環で降伏）らの意見具申を踏まえて、ハルダー自身が作成した侵攻計画案「オットー」（OKH=陸軍総司令部案）では、モスクワの占領それ自体はさほど重視されず、単に敵兵力を誘引するための「囮」のような位置づけがなされていた。

ハルダーをはじめとする陸軍首脳部の構想では、ソ連邦侵攻作戦の主眼は「夏の短期決戦による敵軍事力の殲滅」であり、特定の都市や地域の占領ではなく、可能な限り多くのソ連軍部隊を直接的な戦闘で撃破することに計画の重点が置かれていた。そして、敵に決

ドイツ第18軍参謀長のエーリヒ・マルクス少将が、八月五日にハルダーに提出した対ソ侵攻計画「東方作戦の草案」（通称マルクス案）では、モスクワの奪取・占領は「ソ連邦の経済的・政治的・精神的な中核であるがゆえに、かの国の国家としての調整・統合機能を喪失させる効果をもたらす」ものになるだろうと結論づけられていた。

だが、グライフェンベルク大佐とその部下のファイエルアーベント中佐、同年九月三日に陸軍参謀次長に着任したフリードリヒ・パウルス中将（後に第6軍司令官としてスターリングラード包囲環で降伏）らの意見具申を踏まえて、ハルダー自身が作成した侵攻計画案「オットー」（OKH=陸軍総司令部案）では、モスクワの占領それ自体はさほど重視されず、単に敵兵力を誘引するための「囮」のような位置づけがなされていた。

ハルダーをはじめとする陸軍首脳部の構想では、ソ連邦侵攻作戦の主眼は「夏の短期決戦による敵軍事力の殲滅」であり、特定の都市や地域の占領ではなく、可能な限り多くのソ連軍部隊を直接的な戦闘で撃破することに計画の重点が置かれていた。そして、敵に決

戦を強要する上で最も効果的な方策は、

敵が最も陥落を恐れる地点に対し直接受けた軍事的脅威を及ぼすことである。

との考え方から、ドイツ軍は首都モスクワを目指す攻勢軸を形成して、その正面に敵兵力を誘引した上で包囲殲滅する計画を立案したのである。

四〇年十二月五日、ハルダーはベルリンの帝国官房に赴き、陸軍司令官ブラウヒッヂュ元帥や国防軍総司令部総長カイテル元帥、同統帥部長ヨードル上級大将らが列席する中で、陸軍の侵攻計画案をヒトラーに上申した。ヒトラーは、大筋で陸軍の「オットー」計画に合意を与え、ただちに侵攻作戦の

訓令起案をヨードルに命じた。

これを受けて、国防軍総司令部では、陸軍とは別に研究を進めていたフォン・ロスベルク中佐による対ソ侵攻計画案

「フリツ」(ロズベルク案)と、陸軍のオットー計画、そして「レニングラードとウクライナの占領を侵攻作戦の第一目標に位置づけるべし」という

統合軍の意向を考慮しながら、具体的な侵攻計画の訓令づくりに取りかかった。

それから約二週間後の十二月十八日、ヒトラーは国防軍総司令部から提出された最終計画案に多少の修正を加えて承認し、総統訓令第21号「バルバロッサの場合」として発令した。対ソ戦争序盤におけるドイツの軍事戦略の基礎となるこの訓令において、敵国の首都モスクワの位置づけは、次のように説明されていた。

「ブリピヤチ沼沢地以北の二個軍団（北方、中央）の目標は、白ロシアに布陣する敵兵力の包囲殲滅とレニングラードの占領である。この任務が達成された後、交通および軍需工業の中核であるモスクワ攻略に向けた攻勢作戦を継続する。沼沢地の南部では、ドニエプル川流域の敵兵力殲滅を最優先目標

とする。もし、諸会戦によって早期に

敵兵力の撃破という任務が達成された場合には、ドイツ本国と北欧の隣国場所には、沼沢地北部では迅速にモスクワに到達できるよう努力すること。モスクワの占領は、政治的・経済的に決定的な効果をもたらすのと同時に、敵にとって最も重要な鉄道線の中枢を麻痺させることになるであろう」

つまり、ヒトラーとドイツ軍首脳部は、少なくとも総統訓令第21号が発令された段階では、その政治・経済面での重要性は認識しつつも、対ソ侵攻作戦における目標としては、モスクワはあくまで副次的な位置に留めるとの認識で一致していた。

そして、彼らの計画によれば「白ロシアとドニエプル川以西のウクライナでのソ連赤軍の殲滅」という作戦第一段階の終了と共に、東部戦線におけるドイツの勝利は既に決定的となつていいはずであり、モスクワ正面へと進撃するか否かは、その後で判断しても充分に間に合う問題だと見なされていたのである。

また、ウクライナで産出される豊富な農産物と鉱物資源を早急にドイツの支配下に置くことで、自國の戦時経済体制をより強固なものにしようという

「東方生活圏」構想は、既にヒトラーの戦争政策の中で重要な一角を占めるようになつており、軍の上層部と言えども正面から反駁することは事実上不可

占領を対ソ侵攻の優先目標に位置づけた背景には、ドイツ本国と北欧の隣国との間に位置するバルト海（ドイツ側呼称では「東海＝オストゼー」）の支配権を盤石なものにしたいという、彼なりの戦略的判断が存在していた。

ドイツの軍需産業は、スウェーデンの鉄や、フィンランドのニッケルなど、北欧の国々で産出される鉱物資源に大きく依存しており、その運搬経路であるバルト海は、文字通りドイツにとっての「生命線」とも言えた。そして、もし対ソ戦の開始と同時に、バルト海の端に位置するレニングラードを電撃的に占領することができれば、同市とその沖合の要塞港クロンシユタットを取り除かれるはずだった。

また、ウクライナで産出される豊富な農産物と鉱物資源を早急にドイツの支配下に置くことで、自國の戦時経済体制をより強固なものにしようという



作戦計画を練るヒトラーとブラウヒッヂュ陸軍総司令官(左)とハルダー参謀総長(右)。

最高統帥部と野戦司令官の同床異夢

統統ヒトラーが、レニングラードの

戦争政策の中で重要な一角を占めるようになつており、軍の上層部と言えども正面から反駁することは事実上不可

能な状況が形作られていた。

こうしたヒトラーの構想に対し、陸軍最高統帥部のブラウヒッヂュやハルダーは、原則として同意する意向を示し、四一年一月三十一日に陸軍総司令部が下達した展開命令においても「レンジングラードの奪取とウクライナの占領」が作戦の第一目標に位置づけられていた。しかし、実際にソ連侵攻作戦の部隊を指揮する北方・中央・南方の各軍集団や、その麾下に置かれる軍の司令官たちは、總統訓令第21号および陸軍総司令部の展開命令において、モスクワ攻撃の優先順位が曖昧にされているのを見て、大いなる戸惑いを隠すことができなかつた。

例えば、中央軍集団が白ロシアで敵兵力の殲滅に成功し、南方軍集団がウクライナでそれに失敗した場合、中央軍集団南部の第2装甲軍団は、總統訓令第21号の文面にあるように「モスクワ攻略に向けた攻勢作戦を継続するべきなのか、現状の文面ではどちらとも解釈できた。

こうした事情から、中央軍集団の司令官フォン・ボック元帥と、そこに配

属される第3装甲集団（軍集団北部戦区担任）司令官ホト上級大将は、白ロシアの敵兵力を包囲殲滅した後、同装甲集団が北（レンジングラード）に向かうのか東（モスクワ）に向かうのかがはつきりしないとして、繰り返しブラウヒッヂュに明確な優先順位を聞いただした。

だが、四一年三月三十日に開かれた最高首脳会議の席上、ブラウヒッヂュとハルダーは、議論の紛糾を恐れて、この問題をヒトラーに確かめようとしたボックの発言を途中で遮ってしまう。会議の後、ボックはハルダーに対し「本官が陸軍総司令部より受領している命令文によれば、中央軍集団の第2、第3の両装甲集団は、緊密に接觸を保ちながら進撃すべし、となつておりますが？」と質問したが、ハルダーは笑いながら「それはあくまで『気持ちの上で』の接觸」を言つてゐるのだと答えて、明確な回答をはぐらかした。

ソ連侵攻作戦計画案とソ連の戦略要地

ソ連侵攻計画は、四つの案が存在した。どの計画も、ソ連には三つの重要な戦略目標が存在することと、広大なヨーロッパ・ロシアを速やかに占領するためには、早期に敵野戦軍を殲滅することが必要だという認識は共通していた。各案と

も、どの戦略目標を選択すれば、敵野戦軍の早期殲滅を達成できるかが目的であったが、戦争目的を達成するための「手段」の選択と、そのために目指すべき「目標」はどれか、という考察が欠けていた。

●ヒトラーの計画



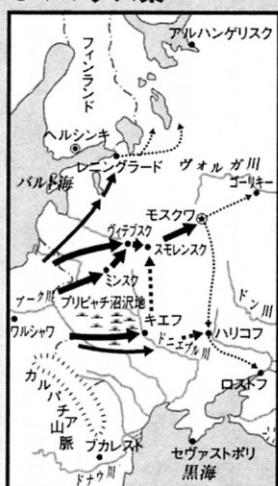
●ロズベルク案(フリツ)



●OKH案(オットー)



●マルクス案



国境～ミンスク間で、ソ連野戦軍を包囲殲滅。作戦重点はキエフとレンジングラード。爾後、モスクワを包囲し、中央部と南部でヴォルガ川の線まで進出。

レンジングラード、モスクワ、キエフへ3本の攻勢軸を形成するが、重点はあくまでもモスクワ。キエフ陥落後、南部の兵力の一部をモスクワ方面に転用。

3本の攻勢軸を形成。主攻は中央部で、ミンスク、スマレンスク、モスクワを団に3回のソ連野戦軍の包囲殲滅を企図。

ソ連中央部のスマレンスク～モスクワおよびキエフを主攻軸とし、スマレンスク前面でソ連野戦軍殲滅。爾後、モスクワを攻略。

Die Kämpfe vor Moskau

誌からも真相をうかがい知ることは難しい。だが、前年のフランスおよびベネルクス三国への侵攻作戦が、完璧とも言えるほどの大成功を収めたことで、陸軍統帥部には自国の軍事力に対する強い自信が生まれており、そうした楽観的な空気が統帥部の判断にも影響を及ぼしていた可能性は否定できない。

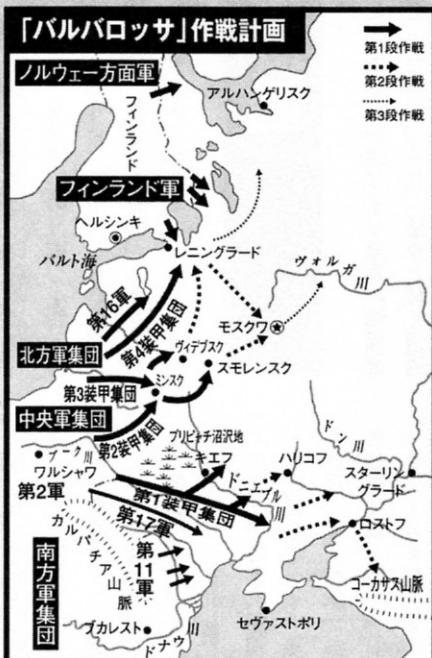
いずれにせよ、対ソ侵攻作戦における戦略目標の優先順位の不明瞭さという問題は、開戦まで解消されることなく放置され、中央軍集団は事実上、明快かつ統一的な戦略目標を持たない「見切り発車」の状態で、侵攻作戦の開始を迎えることとなつた。そして、当然のことながら、作戦の開始から翌月には早くもこの重要な問題が再び表面化して、ドイツ軍の基本戦略を大きく搖るがほど大きな波乱を引き起こすことになるのである。

ヒトラーとブラウヒッヒュ、ハルダーが初めて対ソ開戦についての話し合いで行った四〇年七月三十一日の段階では、ソ連侵攻作戦は一年新春に開始するとの大まかな日程が構想され、

一ヶ月遅れの侵攻作戦開始

ラビア政府は枢軸側の日独伊三国同盟（防共協定）に加盟し、ユーゴ政府は枢軸国に敵対する国家とは外交を断絶するとの態度を表明していた。ところが、第一次大戦でドイツと戦った経験を持つ、ユーゴ国軍内部のセルビア人幹部たちは、この政府の決定に激しく反発。翌三月二十六日の深夜にクーデターを敢行して、ユーゴ空軍の前司令官ドゥシャン・シモビッチ将軍を首班とする新政権を樹立した。

シモビッチは、ただちに三国同盟からの脱退を宣言したのみならず、四月五日にはあろうことかドイツの潜在敵国ソ連との間で、不可侵条約を締結してしまう。対ソ侵攻をこれから開始しようというドイツ軍にとって、戦線の背後に突然現れた「ソ連の同盟国」は、即座に除去しなければならない「脇腹に突きつけられた短剣」のような存在



実際に策定されたソ連侵攻計画は、3本の攻勢軸を形成し、北と南に重点を置き、中央で2回の包囲殲滅作戦を実施し、ついで中央部の一部兵力を北に転用してレニングラード攻略。その後にモスクワを攻略する予定であったが、常にその前提には敵野戦軍の包囲殲滅が存在していた。



ドイツから見たソ連の重要な目標は北から、バルト海に対するソ連海軍の根拠地が存在するレニングラード、政治経済の中心でありソ連全体の交通結節点であるモスクワ、ウクライナの穀倉地帯とともに工業と資源が存在する南部ロシアの三つであった。

だつた。

一九四一年四月六日、ドイツ空軍の爆撃と共に、枢軸軍（ドイツ・イタリア・ハンガリー各軍）のバルカン侵攻作戦が開始され、開始から一週間後の四月十二日にはユーゴの首都ベオグラードがドイツ軍によって占領された。しかし、この予期せぬバルカン侵攻作戦の遂行は、ドイツ軍の対ソ侵攻作戦に、計り知れないほど大きな影響を及ぼすことになる。

ユーゴ侵攻作戦の緊急決定に伴い、

ソ連邦侵攻作戦の開始日は、ただちに一か月後の六月二十二日へと変更された。ところが、南方軍集団の攻勢で中心的な役割を担うはずの第1装甲集団と、中央軍集団の第二梯団を形成するはずだった第2軍の部隊は、バルカンでの作戦終了後、予定日までに彼らの出撃陣地へと帰着することができなかつた。

また、輸送トラックやその交換部品など、対ソ侵攻用に蓄えてあつた備品類の一部をバルカンで消耗してしまつたため、ドイツ軍の補給部隊は当初予定していたよりも少ない数の車両で、膨大な物資の運搬をやりくりしなくてはならなくなつた。

そして、この侵攻開始の遅れは、初雪の予想される十月初頭までの五ヵ月間という、対ソ作戦における事実上のタイムリミットから、丸々一ヶ月以上もの時間を差し引かせる結果となつた。

ソ連軍の首都防衛計画

キエフ転進とモスクワ攻勢の延期

一九四一年六月二十二日、バルト海から黒海に至る三〇〇〇キロの前線でドイツ軍の総攻撃が開始され、四年間にわたる熾烈な戦争——独ソ戦の幕が切って落とされた。

侵攻兵力の中核を担う中央軍集団は、急降下爆撃機と戦車および自動車化部隊の進撃を組み合わせた「電撃戦」を駆使して、開戦からわずか一週間で白ロシア一帯のソ連軍部隊（四個軍・約三五個師団）を事実上壊滅させることに成功し、總統訓令「バルバラツサの場合」で彼らに与えられた第一の作戦目標を達成していた。だが、グデーリアン上級大将率いる第2装甲集団と示

だが、陸軍の上層部は、作戦開始日の変更に伴う基本戦略の見直しを行おうとはしなかつた。抜本的な戦略変更を行なうには、残された時間があまりにも短すぎたからである。

四〇年十一月から十二月にかけて、パウルス中将が兵棋演習を繰り返した上で作成したドイツ軍の作戦日程表によれば、まず開戦から二〇日目（史実の日程では七月十一日）までに西ドヴイナ川（スモレンスク）ドニエプル川の線まで到達し、そこで前線部隊の休養と補給中継点構築のために約三週間停止した後、第二次の攻勢を遅くとも四〇日目（七月三十一日）までに開始することになつていて。

しかし、他の軍集団はもとより、一見順調に前進しているかに見えた中央軍集団ですら熾烈な攻防戦に巻き込まれている現状では、部隊の休息など行えるはずもなく、補充や車両の修理も充分に行える状況にはなかつた。

この状況を見て、ヒトラーと陸軍司令部は七月四日の秘密会議を皮切りに、中央軍集団の第二次攻勢をどこに向かわせるかについての議論を何度も行つた。七月八日の会議では、ヒトラーが「レニングラード攻撃を優先する

て深い森や湿地帯の地形を利用したソ連軍の抵抗に遭遇するようになり、電撃的な突進でレニングラードを奪取るという当初の計画が達成される見込みは皆無に等しかつた。

四〇年十一月から十二月にかけて、パウルス中将が兵棋演習を繰り返した上で作成したドイツ軍の作戦日程表によれば、まず開戦から二〇日目（史実の日程では七月十一日）までに西ドヴイナ川（スモレンスク）ドニエプル川の線まで到達し、そこで前線部隊の休養と補給中継点構築のために約三週間停止した後、第二次の攻勢を遅くとも四〇日目（七月三十一日）までに開始することになつていて。

しかし、他の軍集団はもとより、一見順調に前進しているかに見えた中央軍集団ですら熾烈な攻防戦に巻き込まれている現状では、部隊の休息など行えるはずもなく、補充や車両の修理も充分に行える状況にはなかつた。

この状況を見て、ヒトラーと陸軍司令部は七月四日の秘密会議を皮切りに、中央軍集団の第二次攻勢をどこに向かわせるかについての議論を何度も行つた。七月八日の会議では、ヒトラーが「レニングラード攻撃を優先する

Die Kämpfe vor Moskau



進撃するドイツの機械化部隊。装甲兵員輸送車に描かれた“G”のマークは、
グデーリアンの第2装甲集団を表す。

当初の計画は一時中断し、第3装甲集団を第2装甲集団と共にモスクワ方向へと向かわせ、両翼包囲によつて敵の残存兵力を殲滅する」という計画案を主張したのに対し、参謀総長のハルダーは四日後の七月十二日に「モスクワ

への進撃は一時棚上げして、第3装甲集団は北のレニングラードへ、第2装甲集団は南のキエフ方向へと向かわせるべきだ」との意見をプラウヒッチュに披露している。

その後、ハルダーはグデーリアンや

ホトなど中央軍集団の野戦司令官からの強い進言を受けて自説を撤回し、「現在の攻勢の勢いが衰えぬうちに敵の首都モスクワを目指して進撃を継続すべきだ」との計画案をヒトラーに提案した。だが、いったんはモスクワ進撃案を視野に入れていたヒトラーは、南方軍集団の苦戦を見て、再び「敵軍事力の殲滅」という總統訓令第21号の基本構想に考えを戻し、キエフ周辺に集結しているソ連軍大部隊の包囲殲滅と軍事経済上の意義を持つウクライナの占領を優先すべきだとして譲らなかつた。

北（レニングラード）か、東（モスクワ）か、それとも南（ウクライナ）か。激しい論争が約七週間にわたつて繰り返された後、遂にヒトラーは決定を下し、八月二十一日に次のよだな總統訓令が全軍に下達された。

「冬の到来より前に達成すべき目標は、モスクワの占領ではなく、クリミアおよびドニエツ地方（ウクライナ東部）の確保である。従つて、第2装甲集団は、南方軍集団の進撃を支援するために、キエフの敵突出部を北面から包囲殲滅すべし」

この命令を聞いて愕然としたグデーリアンは、二日後に自ら總統大本営に

乗り込んで激しく抗議したが、決定を覆すことはできなかつた。この總統訓令によつて、第2装甲集団はヴヤジマ攻略の前段階として北東に前进した後、補給と再編成のため一時停止。

中央軍集団のモスクワ進撃は一時延期されたのである。

ソ連側のモスクワ防衛準備

ヒトラーとドイツ軍首脳部が、モスクワ進撃の是非に関する激論を繰り返していたのと同じ頃、彼らの敵であるソ連側では、ドイツ軍のモスクワへの進撃を警戒して、予備兵力と増援の大半をスマレンスクからモスクワに至る街道へと送り込む作戦を進めていた。

国境のブレスト・リトフスクからミンスク、スマレンスクを経てモスクワへと通じる街道は、本来ならパヴロフ上級大将率いる西部方面軍によつて守られるはずだった。

しかし、同方面軍の所属部隊は、開戦からわずか一週間でほぼ壊滅されおり、モスクワのソ連軍最高司令部（スタフカVGK）は手持ちの戦略予備と動員間もない狙撃兵師団群を、

手当たり次第にスマレンスク周辺部へと投入することを余儀なくされた。西ドヴィナ川とドニエプル川に挟まれた狭い回廊部に位置するスマレンスクこそ、モスクワへと通じる西の関門であり、ここを抜かれれば首都の防衛は危機に瀕することが確実だったからである。

ドイツ軍がスマレンスクを占領した七月十日の時点で、ソ連側はその周辺地域に第13、第19、第20、第21、第22の五個軍（狙撃兵三九個師団）を展開しており、さらに後方から第32、第33、第34の三個軍が前線へと向かっていた。

師団レベルの戦闘では、ソ連軍の狙撃兵師団はドイツ軍装甲師団の敵ではなかつたが、ソ連側は戦線を突破したドイツ軍戦車部隊に多方向から散発的な反撃を仕掛け、多大な損害と引き換えに、ドイツ中央軍集団をスマレンスク周辺で足止めすることに成功した。

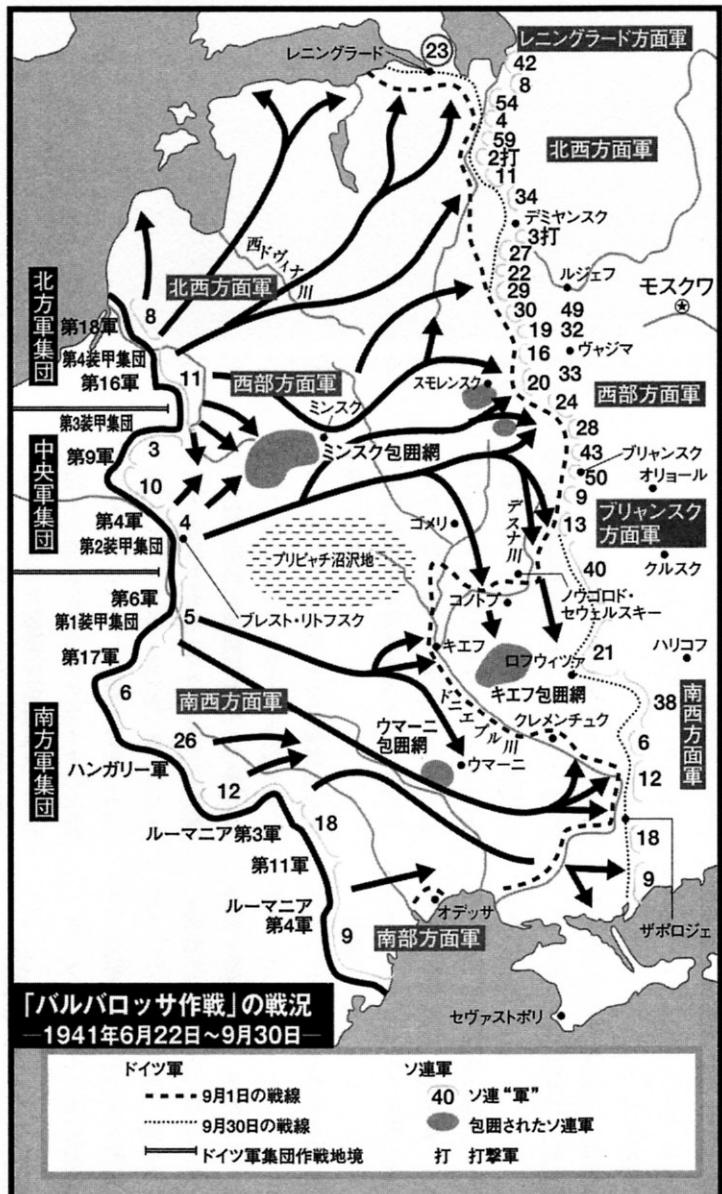
その後、ドイツ軍がモスクワ方面への直進をあきらめ、第2装甲集団の進撃路を南へと反転させると、スタフカはこの時間的猶予を利用してスマレンスク正面の前線の強化を進める一方、スマレンスク東方のヴァジマとその南北のルジェフおよびブリヤンスクを結

ぶ線に新たな陣地帯を構築して、モスクワ防衛の第二線を形成するよう命令した。

これを受けて、ソ連赤軍の重鎮ティモシェンコ元帥によって指揮権を引き継がれた西部方面軍は、南に隣接するエリヨーヌンコ中将のブリヤンスク方面軍（八月十四日に新設）と連携しながら、モスクワ西方から南西に至る地

域に縦深の防衛陣地を設営しようとした。

しかし、独裁者スターリンを最高司令官に戴くスタフカの期待とは裏腹に、ルジェフからヴァジマを経てブリヤンスクに至る陣地帯の建設作業は、すぐ大きな問題に直面して、満足な進展が見込めない状況となってしまう。予備の人員と資材が、前線へと優先的に送り込まれてしまつたため、充分な人



電撃的なドイツ軍の侵攻作戦ではあったが、ドイツ軍首脳部の予想を覆したのが、ソ連軍の莫大な兵力であった。敵野戦軍殲滅に囚われたドイツ軍首脳部は、キエフ周辺のソ連軍を包囲殲滅する誘惑に抗しかね、ついに第2装甲集団の南方転用を決意する。

モスクワ攻略

「台風作戦」の開始

ヒトラーが下した八月二十一日付総統訓令に従い、キエフ東方への進出を命じられたグデーリアンの第2装甲集団は、ソ連軍のブリヤンスク方面軍と南西方面軍の境界を切り裂くように進撃し、八月二十六日にはデスナ川を渡河してノウゴロド・セウエルスキイに到達、九月三日には鉄道の要衝コノト

ブを支配下に置いた。

このグデーリアンの攻勢と連携して、南方軍集団の第1装甲集団は八月三十日にドニエプル下流のクレメンチュクで渡河攻撃を実施し、橋頭堡を確保することに成功していた。そして、コノトブとクレメンチュクを起点に挾撃作戦を展開した両装甲集団の先頭部隊は、九月十四日の夕方にロフヴィツア近郊で手を結び、キエフとその両翼に展開するソ連南西方面軍（狙撃兵三九個師団、騎兵四個師団）の背後で巨大な包囲環が閉じられた。

このキエフ包囲戦での大勝利により、ドイツ軍は白ロシアでの二八万人、スマレンスクでの三二万人、ロスラウリでの五万人、ウマニでの一〇万人に

続いて、キエフで六六万人という捕虜（いずれもドイツ側発表の数字）を獲得し、總統訓令第21号に示された「敵兵力の包囲殲滅」という作戦の第一目標はほぼ完全に達成された。

ハルダーやパウルスら陸軍統帥部が戦前に立てたプランに従えば、この段階で軍事組織としてのソ連軍は事実上壊滅しており、あとは残敵の掃討をしながらモスクワへと兵を進めればよいはずだった。

しかし、現実の展開は彼らの予想を大きく裏切るものだった。一四〇万人以上の兵士を投降させてもなお、ソ連赤軍は強力な兵力をモスクワ前面に保持しており、しかも新たな動員兵力が広大な領土の彼方から絶えることなく湧き出して、ドイツ軍の行く手へと立ち塞がつたのである。楽観的な予想が次々と覆される事態に直面して困惑したハルダーは、八月十一日、自らの不安を鎮めようとするかのように、日記にこう書き記している。

「我々は明らかにロシアの軍事力を過小評価していた。開戦前、我々は敵兵力を二二〇個師団と見積もっていたが、既に三六〇個師団が確認されている。彼らは訓練を欠いた烏合の衆ではあるが、

一ダースの敵を撃破しても、またすぐには別の一ダースが現れてくる。限られた時間という要素は、この戦争では明らかに敵の味方だ」

ヒトラーは、キエフ方面での勝利が見え始めた九月六日、年内にモスクワを目指す大攻勢を挙行するという新たな總統訓令（第36号）を発令していた。だが、実際問題として、敵兵力の殲滅によつて戦争を終わらせるという当初の計画案が、楽観論に基づいた「大い

なる見込み違い」であったと判明した今となつては、もはや野戦軍司令官たちが繰り返し主張した「モスクワの陥落によるソ連体制の崩壊」という不確かな要素に賭ける以外に、彼らが進むべき道は残されていなかった。

こうして、ドイツ中央軍集団に所属する計七七個師団の将兵は、冬の到来を目前に控えた九月三十日、モスクワの奪取を目指す大攻勢「台風作戦」を開始したのである。



ドイツ軍は国境付近の会戦からキエフ包囲網の間に莫大な捕虜と兵器資材を得た。

危機に立たされたモスクワ

守護神ジュー・コフの登場

中央軍集団司令官ボックが立案した攻勢計画によると、モスクワを目指すドイツ軍の六個軍は、装甲集団（各装甲集団は十月五日～八日に、固有の補給段列を含む「装甲軍」へと改編される）と野戦軍各一個をペアとする三本の攻勢軸に分けられ、装甲集団が電撃的攻撃で敵の防衛線に大穴を穿った後、後続の野戦軍が装甲集団の側面および後方援護しながら、孤立した敵部隊を各個撃破する段取りとなっていた。

この総攻撃の矢面に立たされたことになつたのは、西部、予備、ブリヤンスクの三個方面軍司令部に率いられた九五個師団の兵力だったが、ほとんどは定数以下の兵員しか持たない応急編成の二線級師団で、戦車の数もドイツ軍の一七〇〇両（実働台数は約一〇〇〇両）に対し三箇軍合計で八〇〇両足らずしかなく、しかもその大半は非力な軽戦車だった。

九月三十日に、他の戦区よりも一足早く攻勢を開始した第2装甲集団と第2軍は、第一段階ではオリヨールとブリヤンスクを迅速に占領して、ソ連軍のブリヤンスク方面軍の三個軍を包囲してオカ川を渡河し、モスクワの背後に進出する手筈となっていた。

攻勢開始から四日目の十月三日、ドイツ軍第4装甲師団がオリヨールの町を占領し、その西側では第17装甲師団が第2軍の歩兵師団と連携して、十月六日にブリヤンスクを陥落させた。これにより、ブリヤンスク方面軍の退路はいつたん封鎖されたが、広大な後背地を支配できるほどのドイツ軍部隊がないなかつたため、包囲されたソ連軍部隊の多くは重装備を捨てて、戦線の綻びから東の方角へと脱出していった。

戦線左翼の第3装甲集団と第9軍、および中央部の第4装甲集団と第4軍も、それまでの持久態勢を捨てて、十月二日に攻勢へと転じた。第4装甲集団は、年内のレニングラード攻略を諦

めて北方軍集団から転用された部隊である。

左翼の攻勢軸はルジエフとカリーニンを経て北側からモスクワの背後へと向かい、中央部の攻勢軸はカルーガとマロヤロスラウエツを占領した

後、正面からモスクワ市内を強襲する計画だった。攻勢の先鋒を務める第3と第4の両装甲集団は、作戦六日目の十月七日にヴァジマで合流して、ソ連西部方面軍と予備方面軍に所属する四個軍（第19、第20、第24、第32）が袋の鼠となつた。

その後、十月六日から局地的に降り始めた小雪が、やがて本格的な降雪へと変わり始めると、舗装されていないロシア中部の道路網は瞬く間に泥沼化したが、ドイツ軍の進撃を完全に停止させるまでには至らなかつた。タイヤやキャタピラを泥にとられて動けなくなつた装甲師団に代わって、歩兵師団が攻撃の前面に立ち、粘土状の地面をかき分けながら、モスクワへの距離を一キロずつ縮めていった。

開戦以来、スタフカの代表者として、常に戦局の要となる戦線へと派遣されてきたジュー・コフだが、今回の任務はさらに責任重大だった。彼は、自動車や飛行機を駆使して前線の司令部を精力的に訪れ、現地指揮官を怒鳴り散らして作戦上の不備を改善させた後、次の司令部へと向かつた。一方、モスクワ郊外では、数十万人の婦人が勤員



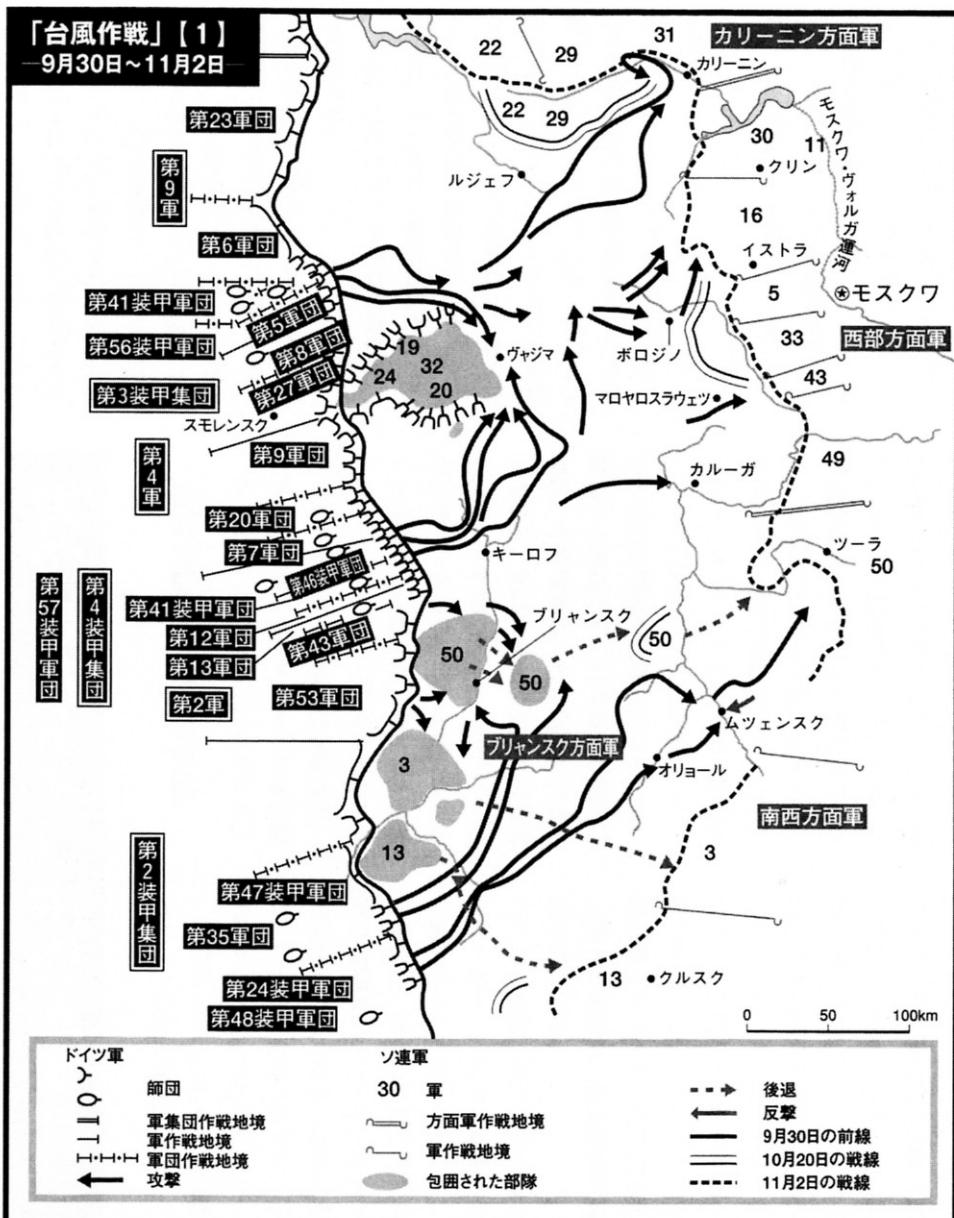
モスクワへ！泥の中を進むドイツ軍将兵。ソ連軍は追いつめられていった。

Die Kämpfe vor Moskau

十月十五日に、ソ連政府のクイブイシエフへの疎開と赤軍参謀本部のアルザマスへの移転が発表されると、モスクワ市民の間ではパニックが起り、群衆が駅や市の東の出口へと殺到した。十月十七日にはモスクワ市内の中重要な建造物に関する爆破準備が命令され、十月十九日にはモスクワ全市に戒厳令が発令された。モスクワ市民の関心は、

モスクワ死守 決断したスターリン

必死の努力にもかかわらず、東へと向かう前線の移動を押し止めるることはできず、十月十三日にはモスクワから一六〇キロの地点にある古都カルーガがドイツ第4装甲軍の歩兵部隊によって占領された。これを知ったスターリンは、もはやモスクワの陥落は時間の問題であると覺悟し、陥落以後の戦争指導を念頭に置いた対策を講じるよう、政府と軍の各部局に指令を下した。



1941年9月30日、モスクワ攻略「台風作戦」は発動された。ドイツ軍の作戦計画の骨子は、モスクワ前面のソ連軍を両翼または片翼包囲し、モスクワ周辺に敵戦力の空白地帯を作り一挙にモスクワを攻略することであった。

さて、寒空の中、塹壕掘りやバリケードの設置などの土木作業に従事させられていた。

しかし、ジューコフら現場指揮官のかう前線の移動を押し止めることはできず、モスクワから一六〇キロの地点にある古都カルーガがドイツ第4装甲軍の歩兵部隊によって占領された。これを知ったスターリンは、もはやモスクワの陥落は時間の問題であると覺悟し、陥落以後の戦争指導を念頭に置いた対策を講じるよう、政府と軍の各部局に指令を下した。

首都モスクワを巡る情勢は、最も厳しい局面に差しかかろうとしていた。

だが、スターリン自身は長い逡巡を

重ねた末、クレムリンに留まり続けることを決心した。飛行場には専用機が用意され、クレムリンに通じる秘密の

地下鉄駅には専用列車が待機して、いつでも独裁者を東方へと脱出させられるよう準備していたが、彼は最後まで

首都モスクワに残って、戦争遂行の陣頭指揮を執り続けた。そして、戒厳令下のモスクワでは、徐々に騒動も沈静化し、志願兵による人民義勇兵師団が次々と編成された。

モスクワの各地で騒乱が発生しているのを見たスターリンは、搖らぎつゝあるソ連国民の士気を高めて、ドイツとの戦争に立ち向かわせるためには、何かしら戦意高揚のためのイベントをモスクワで行うことが必要だと考え、十一月一日に次のような決定を下した。「十月革命の記念日には、例年と同様に軍事パレードを実施する。もしパレード中にドイツ軍機の空襲があつても、死傷者は迅速に片づけて、式典を最後まで行うこと。この式典のニュース映画を撮らせ、焼き増して全国に配布させよ。新聞にも軍事パレードの様子を大々的に報道させる。わしは前日の記念集会で報告し、パレードでも演説しよう」

十一月六日の夜、地下鉄のマヤコフスキー駅に姿を現したスターリンは、革命二四周年を記念する演説を行い、翌七日には小雪のちらつく赤の広場で軍事パレードが行われた。

スターリンが予測した通り、この二

つの行事が、ソ連国民、とりわけモスクワ市民に与えた心理的影響は大きかった。モスクワで編成された義勇兵は一万二〇〇〇人を超え、一〇万人以上の工場労働者が民兵としての訓練に参加した。もはや市内のパニックは完全に消失し、赤軍の兵士たちは強固な一体感を胸に抱きながら、ドイツ軍の襲来に備えた。

一方、このパレードが行われたのと同じ日、モスクワ一帯の気温が低下して、大地は完全に凍結した。モスクワを目標とするドイツ軍の進撃は、燃料と弾薬の欠乏により、十月下旬には停止状態へと追い込まれていたが、途絶えていた補給物資の輸送が部分的ながら再開されると、ドイツ軍の前線部隊はようやく一息つくことができた。しかし、ドイツ本国で準備されていた冬季用の外套や被服類、不凍液入りの冷却水などは、ソ連国内における鉄道網整備の不備が原因で輸送が後回しにされ、前線にはほとんど届いていなかつた。

十一月六日の夜、地下鉄のマヤコフ

スキー駅に姿を現したスターリンは、

革命二四周年を記念する演説を行い、

翌七日には小雪のちらつく赤の広場で

軍事パレードが行われた。

スターリンが予測した通り、この二

力つきだドイツ中央軍集団

モスクワへの最後の攻勢

きだというのである。

十一月十二日から十三日にかけて、陸軍参謀総長ハルダーとドイツ東部戦線の各軍集団および各軍の参謀長が、モレンスク西方一〇〇キロのオルシヤで戦略会議を開いた。議題は、地表が凍結して戦車の活動が可能となつた今、新たな攻勢を行はべきか否かといふもので、北方と南方の両軍集団参謀長は、冬季戦を行うのに充分な装備を持たない現状では、これ以上の前進は不可能との結論を明確に打ち出した。

しかし、中央軍集団参謀長のフォン・グライフェンベルク中将（対ソ軍團立案時の参謀本部作戦部長）は、司令官ボックの強い意向として、モスクワへの攻勢継続は軍事的にも政治的にも必要であるとの報告を行つた。モスクワを占領できない可能性はもちろん存在するが、何もせずに酷寒の地で防勢に転じるよりは、モスクワ陥落によつてもたらされるであろうドイツの勝利、すなわち戦争終結の可能性に賭けるべ

きだというのである。

皮肉なことに、モスクワ攻勢の継続を繰り返し提言してきたゲーリアンは、この頃には既にモスクワ陥落の可能性をほとんど諦めており、第2装甲軍の参謀長フォン・リーベンシュタイン中佐は、新たな攻勢の実行をボックに進言しようとはしなかつた。ゲーリアンが十一月六日の前線視察後にしたためた書簡には、次のような記述が残されている。

「最良の意志も、事実の前にはすべて碎け散ってしまう。敵に決定的な大打撃を与える唯一のチャンスは既に失われ、再び敵に大攻勢をかけるべきか否かは、今の私には判断できない。状況がいかに進展するかは、神のみが知りたもうことだ」

結局、ハルダーはボックの判断を受け入れ、中央軍集団の各軍に対してもスクワ攻勢の再開を命じた。「一九四一年秋季攻勢」と呼ばれるこの作戦は、まず十一月十五日に左翼の第3装甲軍の戦区で開始され、十一月十六日には

Die Kämpfe vor Moskau

中央の第4装甲軍、十一月十八日には第2装甲軍の戦区でも、前線部隊が陣地を出て東への前進を開始した。

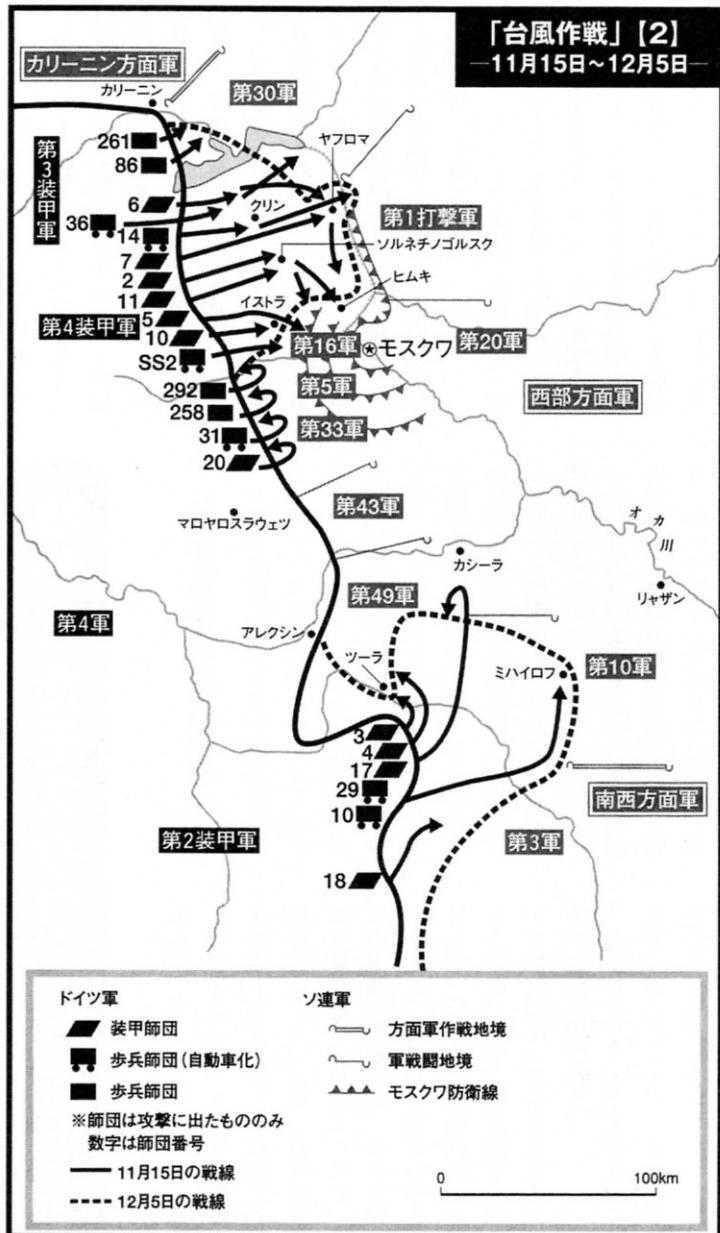
ドイツ軍が、モスクワに向けて新たな大攻勢を開始したとの報告を受けた。スターインは、情勢を悲観して、今度こそモスクワの運命は風前の灯火になつたと考え、十一月十九日に前線指揮所のジユコフへと電話をかけて、今後の対応を相談した。

「君は、我々がモスクワを守りきれる
と本当に確信しているかね？ こんな
ことを質問するのは、我ながら情けな
いとは思うのだが」

に限界に近づきつつあることを察知しており、二個軍と戦車二〇〇両の増援があれば、モスクワは絶対に守りきれると断言した。この時点で、新たな戦車の増援が得られる見込みは少なかつたが、第10軍と第1打撃軍の二個軍がただちに西部方面軍へと編入され、ドイツ軍の攻勢が迫る前線の背後へと配置された。

の生命を賭けた、巨大なギャンブルとして開始された「一九四一年秋季攻勢」は、前線部隊の超人的とも言える奮戦によって、戦況地図の上では着実に成果を挙げているかに見えた。

第3装甲軍は、十一月二十四日に北部の要衝クリンを占領した後、二十八日にはモスクワ北方を流れる重要な運河の対岸に橋頭堡を確保した。



モスクワに向かって最後の攻勢を行うドイツ軍であったが、その力はすでに尽きていた。先鋒部隊はモスクワ市の外郭に20kmと迫りながら、ついに攻勢は挫折した。

だが、前線で戦うドイツ軍将兵の境遇は、壮絶としか評しようのないものだった。零下二〇度～四〇度という酷寒の中を移動しながら、外套も防寒手袋も防寒靴も支給されずに攻撃作戦を続けたために、凍傷で手の指や足の肉を失う兵士が続出していたのである。しかも、弾薬や燃料は致命的なほどに不足しており、仮にこの状態で敵の首

第4装甲軍は、十一月二十六日にルジエフ＝モスクワ鉄道の中継点イストラを陥落させ、その先頭部隊は十一月三十日にモスクワから八キロのヒムキへと到達した。第2装甲軍の戦区でも、工業都市ツーラをほぼ全周で包囲した上、十一月二十四日にはオカ川畔の古都リヤザンまで七〇キロに位置するミハイロフの町を奪取した。

一方、戦線のソ連側では、天候の悪化に伴って、極東方面から送り込まれていた狙撃兵師団（通称「シベリア師団」）が、その本領を發揮し始めていた。日本で活動する諜報員ゾルゲからの情報で、日本軍が北進する可能性がなくなりたと知られたスターリンは、十月以降極東の精銳部隊をシベリア鉄道でモスクワ正面へと移送しており、酷寒での戦闘に長けた彼らは、補給不足と消耗で弱体化したドイツ軍の攻勢を各地で食い止めていた。

また、モスクワ周辺の前線では、労働者や婦人たちが苦労して建設した幾重もの塹壕線が、ドイツ軍の進撃を阻止する上で大きな効果を發揮し始めた。車部隊は、この地形効果を最大限に利用して、以前よりも少ない兵力で、継続的、適切な地形での防御陣地の構築を許可してくれるよう要請した。ボックは、その場でプラウヒッチュに電話をかけ、グデーリアンに前線の状況を説明させた。しかし、プラウヒッチュは作戦の中止を許可しなかった。納得できないグデーリアンは、連絡将校をハルダーの下へ派遣して同様の直訴を行つたが、結果は同じだった。



モスクワ周辺に築かれた防衛施設は、新たに送られてきた兵力が戦闘に参加すると共に、有効に機能した。そうした施設を造ったのは写真のようにモスクワ市と付近の婦人たちであった。

前線部隊の窮状を見かねたグデーリアンは、十一月二十三日の午後、ボックに直談判して、モスクワ攻勢の中止と、適切な地形での防衛陣地の構築を許可してくれるよう要請した。ボックは、冬季戦用の防寒服や凍結防止剤などを持たずに開始されたドイツ軍の攻勢は、日を追う毎に衰えを見せ、赤軍の小部隊による反撃がドイツ軍を後退させたとの報告が、各地からスタフカへと寄せられ始めた。ようやく、待ちに待つた反攻の好機が到来したのである。

十二月五日、まずカリーニン方面軍の第29および第31軍が反攻の火蓋を切り、続いて翌十二月六日には西部方面軍と南西方面軍が、モスクワの北と南で同時に総攻撃を開始した。とりわけ目覚ましい成功を収めたのは、南西方面軍戦区の第13軍と方面軍機動集団で、両部隊は対するドイツ第34軍團の二個歩兵師団をエレツの西方で完全に包囲して、戦死者と捕虜を合わせて約一五六〇〇〇人という損害を相手に与えたこととなつた。

いまや、独ソ両軍の立場は完全に逆転した。十二月六日、中央軍集団の各軍司令官は、モスクワ攻勢の中止を正式に部下へと下達し、敵による包囲を避けるためと、湾曲した戦線を整理して予備部隊を抽出するため、西方方向に配備され、冬季用防寒服に身を包んだ計一三個軍の赤軍将兵が、反撃の方面軍に増援部隊と弾薬、燃料が集中的に配備され、冬季用防寒服に身を包んだ計一三個軍の赤軍将兵が、反撃の準備を整えた。

ソ連軍の冬季反攻開始

ドイツ軍の攻勢が各地で停止しつつあった十一月三十日、スターリンはジユーコフに対し、モスクワ正面で行う大反攻作戦の立案するよう命令した。カリーニン、西部、南西の三個方面軍に増援部隊と弾薬、燃料が集中的に配備され、冬季用防寒服に身を包んだ計一三個軍の赤軍将兵が、反撃の準備を整えた。

十二月五日、まずカリーニン方面軍の第29および第31軍が反攻の火蓋を切り、続いて翌十二月六日には西部方面軍と南西方面軍が、モスクワの北と南で同時に総攻撃を開始した。とりわけ目覚ましい成功を収めたのは、南西方面軍戦区の第13軍と方面軍機動集団で、両部隊は対するドイツ第34軍團の二個歩兵師団をエレツの西方で完全に包囲して、戦死者と捕虜を合わせて約一五六〇〇〇人という損害を相手に与えたこととなつた。

救われたモスクワ



軍司令官は、モスクワ攻勢の中止を正式に部下へと下達し、敵による包囲を避けるためと、湾曲した戦線を整理して予備部隊を抽出するため、西方方向に配備され、冬季用防寒服に身を包んだ計一三個軍の赤軍将兵が、反撃の準備を整えた。

こうして、ドイツ軍の最後の攻勢が退却に転じたことで、対ソ戦争終結の見込みは完全に失われた。十二月八日、フォン・ボック元帥は体調不良を理由に、中央軍集団司令官の座を第4軍司令官のフォン・クルーゲ元帥に明け渡した。翌十九日、陸軍総司令官フォン・プラウヒッチュの辞任がヒトラーに承認され、一週間後の十二月二十六日には、グデーリアンが「命令不服従」の名目で、第2装甲軍司令官を罷免された。第4装甲軍の司令官へーブナーもまた、六日後の四二年一月一日

Die Kämpfe vor Moskau

に同様の理由で解任された。

一方、赤軍はさらに攻勢を続け、カリーニン方面軍右翼と、隣接する北西方面軍の戦区で大攻勢を開始し、第22、

第39、第4打撃の各軍がドイツ中央軍集団の後背地に大きく述べ進出した。ドイツ軍は陣地を構築して、必死に前線を維持しようと努めたものの、満足な冬季用装備もない酷寒の戦場では、彼らの努力も限定的な成果しかもたらなかつた。そして、最前線は四月末頃まで、モスクワから二〇〇キロ以上西の位置まで後退させられた。

ハルダーとボックが行つた「秋季攻勢」というギャンブルは無惨な失敗に終わり、首都モスクワを脅かすドイツ軍の脅威は、完全に取り除かれたのである。

ドイツ軍の敗因

モスクワ攻防戦でドイツ軍の敗北を招く結果となつた主な要因は、ユーロの政変に伴う開戦時期の遅れを別にすれば、計画立案段階から放置され続けた補給計画の不備と、戦争全般における戦略目標の不統一の二つに集約することができる。とりわけ、補給計画の不備による燃料や交換部品の不足と冬

季用装備の欠如は、前線でのドイツ軍部隊、特に装甲部隊の戦闘能力を著しく低下させる、最も直接的な「敗因」であつたと言える。

対ソ侵攻作戦における全般的な兵站計画については、陸軍参謀本部および国防軍兵站総監部によつて四〇年の秋頃から研究が進められていたが、彼らが想定していた「戦場」とは、国境からドニエプル川流域のスマレンスク一帯に至る、奥行き六〇〇キロ程度の領域に過ぎなかつた。その後、開戦から一ヶ月が経過して「敵兵力の包囲殲滅」という作戦の第一段階はほぼ達成されたが、ソ連赤軍が崩壊する兆しは一向に見られなかつた。

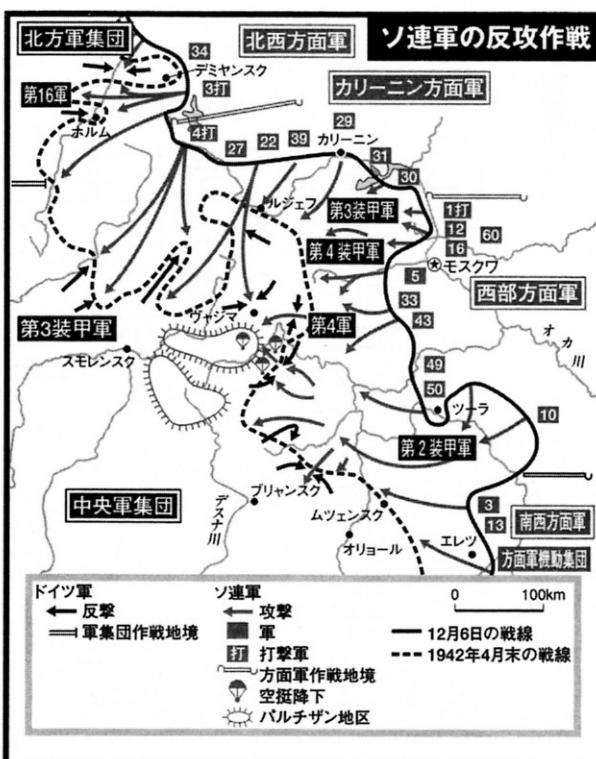
この時点で、彼らは初めて、そこからさらに奥地へと向かう兵站計画を整備し直さなくてはならなくなつた。しかし、大量輸送の根幹となるソ連国内の鉄道網をドイツ側規格へと改修する作業（ゲージ変換）の進展状況は、当初の予定を大幅に下回つていて、

四一年八月から九月にかけての時期にドイツ軍がソ連国内で運転できた貨物列車の数は、一日当たりの目標数値である四三〇トン積み列車三四本の半分以下に過ぎなかつた。そして、冬の

到来と共に外気温が低下すると、ドイツの蒸機関車は凍結による給水パイプの破裂で次々と故障し、鉄道による物資の輸送はさらに危機的な状況へと陥つてしまつた。

要するに、スマレンスクからモスクワへと向かうドイツ中央軍集団の攻勢を支えた兵站管理は、国防軍兵站総監部に所属する現場職員とトラック輸送部隊による、超人的な努力なくしては成立し得ない「本来の計画にない突貫作業」であり、陸軍総司令部が立案し

た補給計画は、最初からモスクワの軍事的占領を想定したものではなかつたのである。



ついにソ連軍の反攻が開始された。ソ連軍の反攻の骨子もまたモスクワ前面のドイツ軍を両翼包囲することであった。ドイツ軍は包囲を避けるためにモスクワ前面から200km以上後退した。

対ソ侵攻開始直前の四一年六月十一日折に導くこととなつた直接の要因である「冬季用装備の欠如」という問題については、「ヒトラーは半年間で戦争を終えられると考えたために、軽率にも冬季用装備の準備を怠つたのだ」という俗説が、広く語られてきた。だが、現実は違つた。ヒトラーは、

に発令した総統訓令第32号「バルバロッ

サ以後の事態の準備について」の中で、
対ソ戦が終結した後の四一年から四二

年にかけての冬の期間に、陸軍の六〇
個師団をロシアに駐留させるとの計画
を立て、この駐留で必要となる冬季用
装備についても陸軍側で手配が完了
していた。

る。

しかし、本稿で紹介した事実関係の
流れを見ればおわかりのように、陸軍
総司令官ブラウヒッচュと参謀総長ハ
ルダーは、計画段階から開戦後の七月
頃まで、基本的にヒトラーの現状認
識を共有しており、ヒトラー対陸軍と
いう形の対立は、当時のドイツ軍首脳
部には存在していなかつたのである。

内での鉄道輸送網が事実上パンク状態
に陥っていたことから、用意された冬
季用装備は、輸送手段がないためボーラ
ンドのワルシャワで山積みになつた
まま放置されてしまふ。そして、グデ
リヤンが罷免覚悟で東プロシアの總
統大本營に赴き、中央軍集団の撤退を
直訴する十一月二十日までの間、ヒト
ラーはこの重大な事実を全く把握して
いなかつたのである。

以上のように、対ソ戦全般の状況を
を踏まえた上で、モスクワ攻防戦にお
けるドイツ軍の敗因を分析すると、そ
の責任追及の矛先は、最高司令官ヒト
ラーだけでなく、兵站計画や戦略目標
の整理という、本来彼らが対処すべき
実務上の最重要課題を何一つ解決しな
いまま、前線部隊の将兵を広大かつ苛
酷な戦場へと送り出した、陸軍総司令
官ブラウヒッচュと参謀総長ハルダー
にも向けられて然るべきであると結論
づけざるを得ないのである。

さらに、ヒトラーと軍上層部における
戦略目標の不統一という問題につい
ても、これまで「ヒトラー対陸軍(参
謀本部)の対立」という単純な図式に
集約されることが多く、あたかも独善
的なヒトラーが陸軍側の合理的な判断
を受け入れなかつたがために、モスク
ワ前面での敗北を招いたかのような見
方が、現在でも一部では信じられてい
る。

ソ連軍の勝因

それでは、ドイツ軍の対戦した相手
であるソ連軍が、一九四一年のモスク
ワ攻防戦に勝利できた背景には、どの
ような要素が存在したのだろうか。

ソ連赤軍の勝因として挙げられるい
くつかの要素のうち、最も重要な決
定的な役割を果たしたのは、物理的な
意味における「部隊数の多さ」だった。
言い替えれば、ソ連軍は、質的な劣勢
を補つて余りあるほど膨大な数の戦闘
部隊を前線へと投入できたおかげで、
モスクワを目指すドイツ軍の進撃を、
時間切れへと追い込むことができたの

である。

モスクワの戦いが行われた四一年九
月から翌四二年四月にかけて、ソ連軍
は軍事上の「戦術」や「作戦」という
分野で、満足な行動を行う能力をほと
んど有していなかつた。独ソ開戦直前
に発生した赤軍幹部の大粛清によって
巨大な軍事力の基幹部分を喪失してい
たソ連赤軍は、緒戦の敗北による前線
部隊の壊滅でさらに致命的な打撃を被
り、新たに動員された狙撃兵師団や戰
車旅団では、充分な軍事経験を持たな
い下級将校が、形式的に大佐や少将の
階級を与えられて部隊指揮官に任命さ
れていたからである。



モスクワは辛くも守られた。だが春の融雪による泥濘の時期が終わるとハリコフ南方のソ連軍突出部を巡る戦いが始まり、ついでカフカスの油田を目指したドイツ軍の「青作戦」が開始される。

Die Kämpfe vor Moskau

ソ連軍の戦車部隊は、緒戦から生き延びた戦車師団、新編成の戦車旅団、応急編成の独立戦車大隊など、編成組織としてはバラバラで、装備戦車も新旧の雑多な車両が混在した上、クビンカ試験場でテスト中だった開発途上の未完成戦車までが動員された。これらの戦車は、場当たり的にドイツ軍の攻勢正面へと放り込まれ、単なる歩兵支援兵器として、事実上「使い捨て」にされた。

だが、硬直した稚拙な戦いしかできない彼らではあっても、敵の進撃路に立ちふさがって、交戦のたびに弾薬や燃料の消費を相手に強いた上、包囲環内部で抵抗して大事な時間を少しづつ奪い取っていくことで、首都防衛のための「時間稼ぎ」に貢献することはできた。モスクワ攻防戦におけるソ連軍の強みとは、戦術・作戦面での自軍の弱点を完全に覆すほどの、人的・物的資源面での圧倒的な優位を保持していたことにあつたのである。

これらに加えて、スターリンが次々と打ち出したソ連国民の士気高揚策が一定の成功を収めたことも、モスクワ攻防戦では大きな役割を果たしていた。スターリンは、開戦から一二日目の七

月三日に「この戦争は、従来の二つの国による戦争ではなく、自分たちの生活を守るために戦争である」との演説を行い、ソ連国民に自発的な戦争への参加を呼びかけていた。

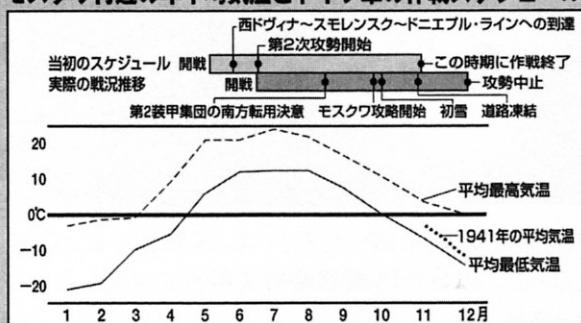
その後、相次ぐ敗北の報せで国民の士気は大きく揺らいだが、モスクワが危機に瀕した際にスターリンが見せた毅然とした対応は、戦争指導者としての彼の威信を高め、民衆レベルで広まりつつあった敗北感は瞬く間に消失してしまった。

その結果、婦人や老人を含む多くのモスクワ市民が、暫壠の構築や民兵組織への参加という形で戦いに加わる道を選び、それに呼応する形で、前線を守るソ連赤軍の将兵たちの士気も高まつていったのである。

もし、一九四一年にモスクワが陥落していたら、ソ連体制は果たして崩壊したのか。その答えは、永遠に歴史の彼方に封印された謎ではある。だがしかし、間違いなく崩壊したと断定できるほど説得力のある根拠は、ドイツ軍人の願望が投影された怪しげな「推測」以外に、現状ではほとんど見当たらないこともまた、動かしがたい事実なのである。

●ソ連軍勝利の要因

モスクワ付近の年平均気温とドイツ軍の作戦スケジュール



1か月の開戦の遅れは、予想以上に戦況に影響を与えた。仮にモスクワ攻略が当初からの計画ならば、本来、モスクワ攻略の開始は8月後半に始まり、計画通りに作戦が進展すれば、晚秋の泥濘期は掃討作戦に費やされ、道路凍結で増加した補給をもって冬営に入ることが可能であったろう。また、1941年の冬は例年よりも気温が低く（最低平均気温はグラフより10から15°C下回る）、冬季装備が欠如したドイツ軍将兵に致命的な状況をもたらした。



両軍の兵力比較（1941）

月・日	ソ連軍	ドイツ軍	
6.22	268万	1	1.4
9.11	346.3万	1	1.16
11.1	220万	1	1.6
12.1	419.7万	1.23	1
		376.75名	403.2万名
		351.7万名	340.7万名

※ソ連軍はヨーロッパ正面のみ
※ドイツ軍はルーマニア、フィンランドなどの同盟軍を含める

開戦以来、常に優勢な兵力を保持してきたドイツ軍であったが、モスクワ攻防戦の時期にはその兵力は減衰し、ソ連軍が優勢となっていた。

独ソ開戦後に編成されたソ連軍の“軍”

37	※★印は再編成部隊
38	※“打”は打撃軍。
29	40
30	42
31	49
32	50
33	51
34	52
43	53
44	54
45	55
46	60
47	6★
48	12★
56	
5★	2打
26	58 10★
57	1打 3打
39	24★ 4打

7 8 9 10 11 12月

ソ連軍は、モスクワ正面の各戦線で疲れ果てたドイツ軍を駆逐していった。冬季装備を身に付けてソ連歩兵とT-60軽戦車。

ドイツ軍の侵攻が始まるとソ連軍は兵力の大動員を開始した。その部隊の多くは、ドイツ中央軍集団の前面に投入された。この動員計画は、1940年の計画に基づくものであり、その意味でドイツ軍はソ連軍の動員能力を過小に見積もっていたといえる。